

Narration from a Child's Perspective : An Analysis
of Two Short Stories

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 芦田川, 祐子 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/706

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



子どもの視点による語り

— 2つの短篇を例に —

芦田川 祐 子

はじめに

子どもの目を通して世界を描くという手法は、文学において特に目新しいものではない。そこにおいて子どもは、しばしば異界からの訪問者の役割を果たし、常識とされているものに疑問を呈したり、大人の社会通念を批判したりする。たとえばマーク・トウェインの『ハックルベリー・フィンの冒険』は、子どもであり浮浪児だという、いわば二重の部外者であるハックの1人称の語りによって、人間の崇高さや醜悪さを浮かび上がらせている。ハックにとって、「ほかのここは窮屈で息がつまりそうだけど、筏ではそんなことはねえ。筏の上にいると、すごく自由で気楽でのんびりするんだ」(上212)というように、人間社会は息苦しく、「こんなひどいインチキにぶつかったのはおらも生まれてはじめてで、人間もここまで落ちられるかと思うと、こっちが恥ずかしくなるくれえだった」(下19)などという批判も生まれる。訳者の西田実は、「ハックの目にうつった大人の社会は、暴力や流血に満ちた恐ろしい世界である。[中略] こういう大人の社会を、宗教や道徳という色めがねをかけていない浮浪児ハックは、ありのままに観察して読者に報告する」(下263)と解説している。また、サン＝テグジュペリの『星の王子さま』では、大人と子どもの中間に位置すると思われる「ぼく」が、別の星から旅してきた子どもである「王子さま」との交流を回想する中で、王子さまが何度も「おとなって、ほんとにへんだな」と無邪気に思うさまを描いている(70, 73, 75, 83)。

これらの子どもたちは、大人社会に対してはよそ者であり、より自由で自然な視点を提供する存在として形作られている。こうした設定には、子どもは大人より根源的であり、真実を知る力をもつという考え方が見て取れる。しかしながら、これらと比較した時、完全な部外者ではないといえる子どもの視点に基づいた作品もある。そこで子どもたちは、何か違う役割を果たしているのだろうか。この論文では、少年を視点人物にした2つの新しい短篇(Lori Ostlundの“All Boy”とRon Rashの“The Ascent”)をとりあげて、子どものまなざしという設定にどのような効果があるかを検討していく。これらは子どもを視点人物に据えた作品の2つの例に過ぎ

ないが、この2作を丁寧に読むのは、一つひとつの作品が異なるように、そこに現れる子どものあり方も厳密には異なっているはずであり、個々の特徴を追うことによって得られる示唆も大きいと考えるからである。

1. All Boy (根っからの男の子)

この作品は、ハロルド (Harold) という11歳の少年の回想や観察とともに、ハロルドの両親が別れるまでを3人称で語った短篇である。作中には、社会通念的に「変わり者」と思われそうな人物が多く登場する。視点人物のハロルドからしてそうであり、それが語られる内容とも大きく関係している。

題名になっている“all boy”は、どこまでも男の子らしい、典型的な少年という意味をもつが、ハロルドはそれには程遠いと自他ともに認める存在である。保護者会のような行事 (back-to-school night) のため両親とともに学校を訪れた際に、ハロルドは母親が自分について他の母親たちに語っているのを聞く。

母は、ハロルドとお父さんが戻ってきたのに気づかずに、まさに彼の作文を指さしながら、地震や太陽系や無足生物に興味のある男の子なのだということを、何分間も話し続けているところだったが、その興味というのが好奇心ではなく恐怖から来るものだということは一言も言わなかった。他の母親たちはお約束どおりの笑いをもらし、ハロルドの母は話の終わりが近づくと声をはり上げて、「ハロルドったら根っからの男の子なんですよ」と宣言して、ハロルドの名を引きながら彼にとっては神のように不可知な少年を描き出した。母は振り向いてハロルドが後ろにいるのを見、その言葉は扉となって二人の間を閉ざした⁽¹⁾。

(275)

ここでは、男の子というのは「地震や太陽系や無足生物」に魅力を感じるものだという前提が共有されており、ハロルドのようにそれらを怖がるのは男の子らしくないとされている。母親は見栄からか願望からか、虚像のハロルドを描き出し、それを聞いたハロルドも、息子に聞かれたことを知った母親も、互いの断絶を感じて気まずい思いをする。母の話のきっかけであるハロルドの「作文」というのは、担任の先生が各生徒の最高作と見て掲示した作品の一つだが、「光合成の過程についての退屈な要約であり、ある朝登校前に急いで仕上げたやっつけ仕事」(275)だった。正確に書かれているせいもあって、それを見ればハロルドは理科が好きなのだろうと人は思うだろうが、ハロルドによると、「実のところ理科は大嫌いで、正確に書いたのも、不正確に書

く方が大変だからというだけの理由によるものだった」(275)という。結果を見れば「男の子らしい」と解釈されるものも、ハロルド自身にとっては全く違うということが示されている。

ハロルドの母が息子の虚像を描いたのは、息子に友だちを作ってやりたいという動機からでもあったかもしれない。母はしばしば、そんなに人にきつく当たらなければもっと友だちができるのに、とハロルドに言うらしい(271)。「もっと」と言っても、そもそもハロルドには友人がなく、そのことに特に不自由を感じている様子もない。知人に「このごろの11歳の男の子はどんなことが好きなの？」と訊かれて、ハロルドは「わかんない」と答える。自分が何を好きかは知っているが、友だちがいないので、同い年の男の子たちについては答えられない、という意味である。ハロルドが学校でどうしているかという、「大人としか関わりを持たない」(266)のだが、その大人も彼の観察によれば、「同級生に見られるのと同じ短所がありがち」である。特に担任教師は、生徒に好かれようとして、ハロルドを皆の前で笑い者にするということが記述されている。ここでは、大人と子どもを区別しながらも、そこに共通の欠点を見出している。

友人と遊ぶ代わりにハロルドが何をしているかという、主に読書であり、そのせいもあって言葉には敏感である。

読書はハロルドのいちばん興味があることで、趣味と呼んで矮小化する気にはならないものだが、それに加えて、彼は非常に特定のことを好んだ。パンケーキを作るのは楽しいがワッフルは駄目だし、母がほこりを払う手伝いは喜んでするが掃除機はかけようとしなない。彼は音の響きが特に好きだったり嫌いだったりする単語のリストをつけていた。今のところ、「予防接種」と「咯出」は美しいと思うが、「減退する」には我慢がならなかった。(266)

ハロルドは「趣味」という言葉に安っぽさを感じているようで、言葉に限らず好き嫌いがはっきりしている。そこにどのような原理が働いているのかは説明されておらず、「今のところ」というように流動性があることも示唆されているが、彼にとっては明確な区別ができるのだろう。

このように、ハロルドは観察眼が鋭く、「同級生の知らない単語を知っている存在でいるのに慣れていて」(267)というように語彙力もあるが、知識が不足しているために解釈を誤ったり、理解できなかつたりすることがある。ハロルドが知らない単語にどう対処するかは、同級生が遊びに来た時のエピソードに見ることができる。サイモンという転入生が家に来て、ハロルドの母は“lustful”に見えると述べる。人より多くの言葉を知っていると自負するハロルドは、しぶしぶ「どういう意味かわからない」と言い、「セックスをしたそうな」という意味だと教えてもらう(267)。ハロルドは、友だちになるかもしれない相手の母親についてそんなことは言うべきではないと感じ、母が叔母にかける電話の会話から両親がセックスをしていないのを知っているの

で、とりわけ不当なコメントだと考える（だからこそ当たっているかもしれないという可能性は思い浮かばないようである）。

ハロルドはサイモンを二度と家に呼ばないが、サイモンはその一度きりの訪問の時にもう1つハロルドの知らない語を使う。ハロルドが親しくしている図書館司書のテスキー氏について、普通は3冊までだが自分には5冊貸してくれるとハロルドが話すと、サイモンは「それは彼が fag だから」と言う（269）。ハロルドには“fag”の意味がさっぱりわからず、ひとまず文脈から推測して、助けになるということだと考える。サイモンは笑って「お前も fag だ」と言う（270）。サイモンとの話はそこまでだが、次の段落では、サイモンが帰ってからハロルドが辞書を引いたことがわかる。

“fag”とは、本当に頑張って働くという意味だと判明した。辞書には「骨折って働く」とあった。これで意味は通じる。テスキーさんはとても頑張って働いているからだ。無論、ハロルドは普段なら、サイモンが名詞として使ったのにこの“fag”は動詞だと気づいたであろうが、サイモンの訪問によってくたびれ寄る辺ない気持ちになっていたので、この明らかな区別を見逃してしまったのである。ハロルドは棚のいつもの場所に辞書を戻し、何か異状はないか、この落ち着いたなさを説明できるものはないかと部屋を見回した。（270）

ここでの語りの一部は変則的に、当時のハロルドの視点を離れ、彼の過ちを明らかにしている。読者には、名詞の fag の意味を知っていることが期待されているともいえよう。ハロルド自身、一応疑問は解決したと考えながらも、何となく不安を感じている。サイモンの口ぶりでは、ほめ言葉とは思えなかったのだろう。夕食の時、保護者会に備えて学校の先生たちの名を挙げながら、ハロルドはこの語を早速使ってみて、母に叱られる。

「テスキーさんにも会うといいよ」とハロルドは言い、新しい単語をすぐ使用する癖があったので、こう付け加えた。「fag なんだ。」

「ハロルド」と母が怖い声で言った。「人のことをそんな風に言うものじゃありません。とんでもない非難です。」父は何も言わなかった。（273）

ハロルドは何がいけないのか理解できないが、経験上こうした時は母に口答えしない方がよいのを知っているので黙る。そこから最後まで、“fag”という言葉は出てこないで、それが男の同性愛者に対する蔑称であることをハロルドは知らないままだと思われる。

この視点人物ハロルドの知らない言葉が、物語を読む上で鍵になってくる。ハロルドは見聞き

したものを回想も交えて伝えるが、知識が不足しているだけではなく、あまりそれらをつなげて解釈しようとはしない。それに対して、読者はハロルドの知覚を通して得られる断片的な情報をもとに、何が起きたか筋道を立てて理解することができる可能性が高い。たとえば、ハロルドは両親の口喧嘩が増えるにつれて母が叔母へかける電話も多くなっていることを理解するが、彼には「その口論の原因が時にはとても些細なことなので、目の前で発生してもなぜそんなことで喧嘩になるのかわからない」(268)という。その適例として回想されるのが、感謝祭の出来事である。七面鳥を切り分けた時、母はハロルドに胸肉を与えながら、「お父さんは胸に興味がない」と言い、それまで普通に談笑していた父と急に陰悪な雰囲気になる(268)。ハロルドは食後に自室に引き取ってから、両親が怒鳴りあっているのを漏れ聞く。

「何のことを言ってるかわかるだろ」と父が叫んだ。

「やあね、チャールズ、落ち着いてよ」ハロルドは母の声がかすかにつかえるのを聞いた。母は笑いたいのだ。「あの子は私が七面鳥の胸肉の話をしてると思ったのよ」。母は間を置いた。「もちろん、私もその話をしてたし」。(269)

ここからわかるのは、鳥の胸肉以外の話があったということである。両親ともそのことを知っていて、それが不和の原因になっている。2人がセックスをしていないという情報を合わせると、母は父が自分に興味を持たないことを当てこすったのだろうと予想がつくが、ハロルドには意味がわかっていない。その後の語りは、父が怒って家を出ていくのがハロルドに聞こえ、母が泣きながらハロルドにおやすみを言いに来ることを報告するだけである。

地の文でははっきり書かれているわけではないが、上の事件をはじめとして、ハロルドが父に関して見聞きしたことを総合すると、父は同性愛者か、少なくとも女性より男性に興味があるらしいことがわかる。父親は筋骨たくましい男性に憧れて、身体を鍛える部屋を持っている(276)。また、保護者会の日にハロルドとともに司書のテスキー氏に会いに行き、いつもは会話上手なのにテスキー氏に対しては失敗する(275)。その1週間後、ハロルドがいつもより早く帰宅すると、母はそれに気づかず叔母と電話をしている。

「どうやら私たちが出会う前からなのよ」と母が言っているのが、お湯の沸くのを待っているハロルドの耳に届いた。「でもあの人が私に話す気があったと思う？ 私なんかただの妻よ——何も見えてない、都合のいい、一銀行員の妻」。

母は一瞬耳を澄ませ、鋭くささぎった。「利いた風なこと言わないで、エリザベス。そんなのわかってるわよ」。母は鼻を鳴らした。「クローゼットの中に(“In the closet”)」と嘲

るように言った。「そんな言い方、どこから持ってくるわけ？」(276)

この後、父が家を出て行くことが判明するのを鑑みると、ここで母は父との別れについて叔母に愚痴を言っていると考えられる。電話の会話を聞かれたことを知らない母に、ハロルドはさりげなさを装って、自分が子守のノーマン夫人にクローゼットに閉じ込められた話を持ち出し、夫人がそのせいで首になったのではなく、父の靴下を履いて逆鱗に触れたからだということを知る。母の発言が気になってはいても、“in the closet”が家具の話ではなく、隠し事をするという含みを持つことには思い当たらない様子である。これも言葉に関するハロルドの知識不足から来た解釈の至らなさといえよう。“In the closet”の逆の表現が“come out of the closet”であり、特にいわゆるカミングアウト、同性愛者であることを公にするという意味である。実際、出て行くときに父はハロルドを呼んで、こう言う。「基礎的な経済理論によれば、人間はいつも、さらなる獲得を目指してではなく、既に持つものを失わないように懸命に働く。ものを得るという可能性がやる気を出させるより、失うことの方がいつもずっと辛いからね。これを覚えておいてほしいんだ、ハロルド」(277)。そして続けて、「新しい友だちができて、一緒に住むことにしたんだ」と言い、ためらって「彼と」と付け加える。父は既に持つ妻子を失うのは辛い、それでも新しいパートナーとの生活を選んだということなのであろう。ハロルドは父の意図を汲みとれなかったのか、父が男性と同居するために去ることについての意見は何も表明しないが、父が習慣にしていた就寝前の戸締りの点検がなくなることに不安を覚える。ハロルドが父を見送りながら、以前閉じ込められたクローゼットの安心感を切望するところで作品は終わる。

クローゼットはハロルドにとって安心できる場所であり、作品の冒頭もそれに関する回想であった。

後に、ハロルドがようやく、両親が子守のノーマン夫人を解雇したのは、好きなテレビ番組を見る間ハロルドをクローゼットに閉じ込めたせいではなかったと知った時、自分がそもそもどうして夫人の解雇をそれと結びつけたのか想像もつかなかった。とりわけ両親は、彼が閉じ込められたと聞いてもさほど動揺した様子を見せなかったのだから。(263)

ここでいう「後」とは、父が去ることになった日のことだと思われる。この書き出しは、これまで追ってきた本作の重要なテーマを2つ含んでいる。1つは解釈の可能性に関するもの、もう1つはクローゼットについてである。ハロルドは子守の解雇の原因を自分が誤解していたことを知るが、上に指摘してきたように、この短篇の中には、当時のハロルドにとって誤解しているかどうかさえわからない謎や、そもそも解釈されなかったと思われる出来事が散見される。この点で

ハロルドは、読者に断片的な情報を提供しながら、解釈や理解の道筋を意識させる役割を担っているといえる⁽²⁾。読者はハロルドに対して優越感を覚えることができるが、同時に、すべてを理解できる人間はいないということも思い出させられるかもしれない。大人も子どもも、世界を理解しようとする道筋は変わらないのである。また、クローゼットに関しては、ハロルドにとって印象深かった、外の世界を忘れられる暗くて閉ざされた憩いの場所として描かれていると同時に、父の秘密につながる語としても登場している。この父子は、社会で主流とされる男らしさ、少年らしさから外れている点で共通している。「根っからの男の子」とかけ離れた少年の視点を通すことによって、人間にはさまざまな個性があることに注意を促し、社会通念とされるもの、特にジェンダーに関する考え方について問い直す働きがあるといえよう。

2. The Ascent (上昇)

この作品も、ハロルドと同年代である、小学5年生のジャレッド (Jared) 少年を視点人物に据えており、クリスマス休暇の数日間の出来事を追った3人称の語りからなる。ハロルドの時と同じように、はっきりそれとは言われないが、情報をつないでゆくと見えてくるものがある。

ジャレッドも両親と暮らしているが、ハロルドとはかなり違う環境に生きている。冒頭でジャレッドは雪の中を歩いているが、それは主に両親のせいで、「ぐらぐらの椅子もたわんだソファも、テレビと電子レンジがあった隙間も、何もかもが悲しく感じられる家の中にいるよりは、寒い日でも外で過ごした方がいい」(279) という。何らかの事情で家計が苦しくなり、テレビと電子レンジを売らなければならなかったのだろう。その事情は、両親の習慣から明らかになる。ジャレッドが帰宅すると、「例の小さな赤いガラスのパイプ (“the small red glass pipe”) がコーヒーテーブルに載っていて、脇に空の小袋 (“baggie”) が1枚あった」(281) と描写されている。ここでは何に使うか述べられていないが、このパイプはジャレッドにとって、定冠詞をつけるほど見慣れたものであることがわかる。この日ジャレッドは雪の中で、墜落した飛行機と男女の遺体を見つけ、女性がつけていた指輪をこっそり持ち帰ってきたのだが、父に見つかる。父は夜のうちにそれを街に持って行ってしまい、翌朝ジャレッドが見ると、「ガラスのパイプはコーヒーテーブルに載っていて、脇に4つの小袋があり、2つにはまだ粉が入っていた。今まで1つより多かったことはないのに」(283) という状態で、両親は上機嫌である。しかし長くは続かず、「月曜の朝、小袋は空っぽで、両親は具合が悪かった。母は掛け布団にくるまって寝椅子の上で震えていた」(285) とあり、「しばらくすると母はパイプに火をつけ、ちょっぴりでもあるかもしれない残りを深く吸い込んだ」と記述される。宝飾品と引き換えられた粉はパイプで吸うためのものだった。母が父に「ウェズリーに会いに行って」と頼み、父が「もう金がない」と答えるやりとりも

あって、両親は麻薬中毒だということが示唆されている。

親という身近な大人の言動について、たとえ多数派の考えや社会通念に反することでも、ジャレッドが価値判断を下さないのは、ハロルドと同様である。麻薬の売買や吸引が多く为国で禁じられていることを知ってか知らずしてか、ジャレッド自身は麻薬に手を出していないが、両親が悪いことをしているという認識もない様子で、「パイプ」と「小袋」の存在は日常生活の一部として淡々と語られている。この親子の間にもハロルドの親子と同じく思いやりは見出せる。禁断症状に苦しむ両親を見て、ジャレッドは自分がクリスマスプレゼントにもらった自転車を売ってよいと言い、両親がそれはお前のだからと断ると、墜落機の男性の遺体から腕時計を取って来さえる。両親はお金が入ると麻薬とともにジャレッドの好物（シリアルやハンバーガー）を買ってきたり、できる範囲でクリスマスを祝おうとしたり、息子が遅くまで外にいると心配したりして、愛情を示しているが、生活は荒みがちで、犯罪であるかどうかに関わらず、麻薬のもつ危険性や破壊力が浮かび上がっている。

ジャレッドがハロルドと違うのは、空想に浸りがちなところである。これには、辛い現実生活からの逃避という面もあることが暗示されている。ジャレッドの空想癖は彼の視点からの語りの特徴づける大きな要素といえる。最初に偶然飛行機を見つける前、雪の中を歩きながら、ジャレッドはクラスで前の席に座っているリンディーという少女のことを考えている。

ジャレッドはリンディーが横を歩いているというふりをし、彼女に雪の中の足跡を見せながら、どれがリスでどれがウサギでどれがシカの跡か教えてやった。クマの足跡も指し示すと、リンディーはクマが怖いと言い、ジャレッドは君を守ると言う。

ジャレッドは立ち止まった。人間の足跡は見なかったが、振り向いて誰もいないことを確かめた。折りたたみナイフを出してかざし、それが獵刀でリンディーが隣にいるということにした。クマが来たら君を守るから、と声を出して言った。ジャレッドはリンディーに空いた方の腕をとられたと想像した。名前は知らないが、もう1つの尾根を登りながら、ナイフを構え続けた。尾根を登る間、リンディーはずっと彼の腕にしがみついていた。あなたの服が臭いなんて学校で言ってほんとにごめんなさいとリンディーは言った。(279-80)

現実のリンディーとは学校でしか顔を合わせず、会ってもジャレッドに好意のある素振りを見せてもらえないことが窺われる。母親が3日も風呂に入っていないという描写もあるように(285)、ジャレッドの家では清潔さに気を配る余裕がなく、衣類の洗濯も滞りがちなのであろう。ここではリンディーに好かれ頼りにされたいというジャレッドの願望が、空想として形をとっている。初めは「ふり」や「ことにした」や「想像した」などという表現で、それが現実の出来事ではな

いことを明示しているが、ジャレッドの動作や発話は実際に行われていることであり、最後の2文では、空想の中のものという前置きもなく、リンディーの存在や言葉があたかも架空ではないかのように語られている。墜落した飛行機の女性の指輪をジャレッドが取ってくるのは、そのきれいな石をリンディーに見せたかったため、それをあげればリンディーに好かれるのが本当になると思ったからである(282)。ジャレッドのリンディーへの関心は、ハロルドが同い年でも女の子のことは考えていなかったのとは対照的である。

しかしジャレッドが空想に浸るのは、女の子のためばかりではない。結末近くで、ジャレッドは腰にロープを結び、死者の腕時計を取りに行くために、自分のつけた足跡をたどって再び飛行機へと向かう。

空は灰色で、黒い雲が西の方にあった。じきにもっと雪が降るだろう、ひょっとすると午後までに。ジャレッドはリンディーに、一緒に行くのは危険すぎると言い聞かせた。彼はアラスカで救助の仕事に赴くところで、腰に巻いたロープで食料と菓で満杯のそりを引いていた。足跡は彼のではなく、救助を待っている人々のものだった。

飛行機に着くと、ジャレッドは装備を解いて男の人と女の人に飲食物をあげるふりをした。[中略] ジャレッドは男の人の手首から時計を取り、上を向けて掌に載せた。あなたのコンパスを持っていかなければならない、とその人に言った。ブリザードがやって来るから、必要になるかもしれないんだ。(286)

今回はリンディーを置いて1人で出かけたことになっている。雪の降り出しそうな現実の描写と、ジャレッドの空想の中で進む救助の物語が混在している。ジャレッドにとってはこの空想も現実なのだと言ってもよいかもしれない⁽³⁾。指輪を抜き取る時には理由をつけなかったが、今回は、腕時計を取るのはこの人々のために行動しているからだということになっている。ジャレッドの視点を通すことで、読者はそこに実在すると思われる以上の物事を見聞きし、いわば同時進行する2つの物語もしくはそれらの融合を体験することができる。

この短篇の結末で語られるのも、こうしたジャレッドの空想または幻覚である。彼の持ち帰った高級腕時計を売って麻薬を入手するために両親が車で出発した後、ジャレッドはスパナと金槌を持って、雪の中、今一度飛行機を目指す。彼は道具で飛行機を「修理」して後部座席に乗り込み、雪を眺める。

しばらくして彼は震え出したが、もうしばらくするともはや寒くなくなった。ジャレッドは脇の窓から外を見て、白さが前だけでなく下にもあるのを知った。離陸してとても高い所ま

で上昇したので、雲に包まれたのだということがわかったが、雲が開けるのを期待して見下ろし続けた。両親の青いトラックが、自分たちと同じ所に向かって雪の中を進むのが探せるように。(287)

ジャレッドは持参した道具を「持ち帰らないで済む」(287)と考えており、自宅には戻らないつもりで来たと思われる。最初に訪れた時にも後部座席に座って心地よさを感じ、いつしか2時間もたっていたという描写があるので(281)、墜落した飛行機で雪に包まれて遺体とともに過ごす方が、家にいるよりも快適なのであろう。しかし、同時に両親とも一緒にいたいという気持ちがあると見え、自分たちは空から、両親は車で地面を進むという違いはあるものの、目的地は同じだとしている。皆の向かう先はどこなのだろうか。街のどこか特定の地点かもしれないし、白さに囲まれ、恍惚として我を忘れる状態、特に死であるのかもしれない。救助を待つ遺体の男女と、麻薬めがけて突進中の両親とが重なり、ジャレッドも凍える死に近づきつつあると解釈できるが、考えてみれば死は誰もが向かう先ではある。行きつく先がどこであれ、この短篇はここで終わり、もはや語る事が無い、または語れない状態に視点人物が到達したことを表現していると取れる。

おわりに

ここまで、同じ年頃の少年を主たる視点人物に据えた2作品の語りを分析し、どちらも身近な大人である両親の抱える問題、特に社会的には周縁に位置すると思われる行為を描きながら、部分的にはそれぞれ異なる特徴や効果をもつことを見てきた。しかしまとめて考えると、どちらもある種の子ども観を表現しているといえる。「子ども」に関しては、さまざまな見方があるが、ハロルドに目立つ知識の未熟さも、ジャレッドの空想との親和性も、「子どもらしさ」とされる特性としてよく表れるものである。たとえばトルキンは、子どもと妖精物語の自然な結びつきを否定する時、「子どもという種族は——経験が足りない、という共通点をもっていることを除けば、ひとしなみに見ることはできないのだが」(75)と表現し、子どもを一括りに捉える風潮を批判しながらも、その究極の特性は経験不足だとしている。またレズニック＝オーバースタインは、「子ども期というのは、伝統的なロマン主義の表すところでは、想像とファンタジーと夢の時代である」(197)と指摘している。ハロルドもジャレッドも、これらの特性を保ちつつ、各作品の語りの根幹をなす人物としてテキストに構築された存在である。子どもを視点人物に定めることで、これらの作品は従来の子ども観を受け継ぎながら、厳密に考えるとそれぞれの作品中にしか存在しない、独自の子ども像を築き上げているといえる。

《注》

- (1) これ以後、どちらの短篇についても、本文の訳は全て筆者によるものである。
- (2) ヘンリー・ジェイムズの「メイジーの知ったこと」でも似たようなことが起きているが、そこでは語りがしばしば、「運命の定めるところ、この辛抱強い少女は、はじめ自分の理解をはるかに超えるものを見なければならぬのであった」(264) というように、メイジーの意識のあり方を客観的に解説している。
- (3) 「永遠の子ども」として有名なピーター・パンの特性の1つに、ごっこ遊びが本当のこととして体験されるというものがある。「ふつうの子ども」とは違って、「ピーターにとっては、たべるふりは、まったく、ほんとのこととおなじなので、そういうふりをしているまに、ピーターのふとるのがわかるくらいでした」(バリー 135) という。ピーターは極端な例といえるが、ジャレッドの行動も同種のものとして理解することができる。

引用文献

- サン＝テグジュペリ 『星の王子さま』1946. 内藤濯訳, 岩波少年文庫, 2000.
- ジェイムズ, ヘンリー 「メイジーの知ったこと」1897. 川西進訳. 『ヘンリー・ジェイムズ作品集 2』国書刊行会, 1984. pp. 257-571.
- トウェイン, マーク 『ハックルベリー・フィンの冒険 (上) (下)』1885. 西田実訳, 岩波文庫, 1977.
- トールキン, J. R. R. 『妖精物語について』1947. 猪熊葉子訳, 評論社, 2003.
- バリー, J. M. 『ピーター・パンとウェンディ』1911. 石井桃子訳, 福音館書店, 1972.
- Lesnik-Oberstein, Karin. "Fantasy, Childhood and Literature: In Pursuit of Wonderlands". *Writing and Fantasy*. Eds. Ceri Sullivan and Barbara White. London: Longman, 1999. pp. 197-206.
- Ostlund, Lori. "All Boy". 2009. *The Best American Short Stories 2010*. Ed. Richard Russo. Boston: Mariner, 2010. pp. 263-78.
- Rash, Ron. "The Ascent". 2010. *The Best American Short Stories 2010*. Ed. Richard Russo. Boston: Mariner, 2010. pp. 279-87.

(平成23年9月30日 提出)